

中原中也と〈京都〉——心象風景として再構築された〈都市空間〉——

渡 邊 浩 史

近代都会の中では言葉を少くする必要がある。——中原中也⁽¹⁾

1 序／分析の方法

中原中也は一九三六年八月、自身の詩人としての経歴を回顧し、それを年代記風に綴った「詩的履歴書⁽²⁾」という生前未発表の回顧録をノートに記しているが、その中には「京都」に関する次のようなコメントがある。

大正十二年春、文学に耽りて落第す。京都立命館中学に転校す。生れて始めて始めて両親を離れ、飛び立つ思ひなり、その秋の暮、寒い夜に丸太町橋際の古本屋で「ダダイスト新吉の詩」を読む。中の数篇に感激。

大正十三年夏富永太郎京都に来て、彼より仏国詩人等の

存在を学ぶ。大正十四年の十一月に死んだ。懐かしく思ふ。

この「詩的履歴書」には中原が記憶／回顧する「京都」での出来事が大雑把にだが記録されている。この記録された歴史性に我々の視線は固定されていき、当然のことながら、その記録／歴史を契機にして論を展開させるという方法が中原の京都時代を探る試みとして用いられてきたことは言うまでもない。例えば、大岡昇平は「詩的履歴書」の「京都」に関する言説を読んだうえで、京都時代の中原の動向を想起／検討しているし⁽³⁾、吉田熙生はこの回顧録を端緒としつつ、京都時代の中原の足跡を調査している⁽⁴⁾。また、遺族や当時の恋人によって語られた文章が発表されたこともあり⁽⁵⁾、従来の研究史では、中原中也への作家的関心から彼自身の心情の分析に興味の中心が移されていく。具体的には、京都時代における作家・中原中也の再現Ⅱ表

象にのみ、焦点が置かれてきたと言えるだろう。

確かに、中原中也のようになかば神話化された詩人の伝記的事実から復元／構築される作家像は非常に魅力的なものがある。大岡昇平や吉田熙生の評伝を手に取り、頁を繰っていけば、下手な小説を読むよりも興味深い詩人・中原中也の波瀾に満ちた生涯が現前化するだろう。⁽⁶⁾しかし、伝記的な側面に固執することで、作品本来の自律性が狭められていることも確かである。作家の伝記をコンテキストにして作品に立ち向かえば、自ずとそこに立ち現れてくるのは、作家を投影した物語の断片であるからだ。

こうした詩人や関係者の言説を特権化して作家の人間性を論じる問題系に対して、佐々木幹郎は詩人を取り巻く当時の政治性から捉えようとする。

京都にいた当時十六歳の中原中也の顔付きを浮かびあがらせるために、関東大震災という要素から光りをあてると、自ずから連動して目にとまるもうひとつの要素がある。／彼自身も言及しているこの年の秋のダダイズム詩（『ダダイスト新吉の詩』（一九二三・二一 中央美術社）との遭遇という事件である（一）内は引用者、以下同じ）。（中略）この詩集の発行年月を見ればわかるように、関東大震災より前のものである。ダダイズムだけではなく、第一次

大戦後のヨーロッパで起こった前衛芸術運動（立体派、未来派、表現派、構成主義、シュールリアリズム）の多くが日本に紹介されたのは、震災より前なのだが、注意すべきなのはそれが力を持ち出し、運動として展開され、強い関心と呼ぶようになったのは震災以後であるということだ。（中略）この遭遇以降、中原は自らを「ダダイスト」と呼ぶようになった。また友人達からも「ダダイさん」と呼ばれるようになる。このときの十六歳の中学生の心の動きは、震災以後の日本という、急速に変化する都市生活とそこでの精神状況の嵐の中に、点景として置いてみたとき初めて焦点を結ぶように思える。⁽⁷⁾（傍線引用者、以下同じ）佐々木は「関東大震災という要素から光りをあてる」ことにより、中原と「ダダイズム」との関係性について論究する。「震災以後の日本という、急速に変化」した地方都市「京都」で、中原が「ダダイズム詩と遭遇」する必然性を佐々木は「日本のダダイズム運動の特徴は、その運動の推進者の多くが、東京出身の辻潤を例外として、地方在住者あるいは地方出身者で占められていたこと」によると分析する。このような当時の（大きな物語）としての政治的事象が中原にもたらす影響関係を軸として、京都時代の中原の動向を探求していく佐々木の方法には教示される面が多い。本稿では作品

を分析・読解していくなかで、この視点を継承／展開していく。

文学作品には歴史的・地理的な史料や、雑誌・新聞記事等などの資料データを取捨／選択し、それらの文脈から切り取ったテキストに変形・仮構を加え、縦横に織り成した新しい言語編成のテキストとして生成させることを一つの目的としているところがある。つまり、作中に描かれた風景や人々の姿は、作者の構築段階で変形^{デフォルメ}が加えられた「新たな意味内容」として生成されたものだ。それらの「意味内容」を分析していくことは、文学作品の本質を理解するうえで必要な作業であると言えるだろう。——佐々木は政治的な文脈のなかから詩人・中原中也の動向を捉えた。本稿では、当時の政治的事象及び文化状況と中原文学の相関性について論及したい。具体的には、中原が作品に織り込んでいった〈京都〉の表象について検討していく。その方法として、まず〈京都〉に関する記述がなされた作品を取り上げていき、作品内部の情報のみで分析・読解を行い、作品内での〈京都〉の表象について考察していく。次に、作品をそれを取り巻く社会的・歴史的な「京都」のコンテキストの中から捉え直してみたい。これら一連の作業は、京都時代における詩人・中原中也の再現Ⅱ表象に焦点を置くものではない。中原文学のなかで表象される〈京都〉というテキストの意味内容を社会的文脈と作品言説の関係性だけで読み取ろうとする試みで

ある。——そして、作品に表象された〈京都〉を繙いていくことで、中原文学の（織物^{オリモノ}）を分析する視座の一つを確保したい。

2 「ゆきてかへらぬ——京都——」に表象された〈京都〉

一九三六年一月、同人誌『四季』に中原の詩篇「ゆきてかへらぬ——京都——」が掲載された。中原の韻文、散文でそのタイトルに「京都」の文字が入っている唯一の作品である。

ゆきてかへらぬ（未定稿）

——京都——

中原 中也

僕は此の世の果てにゐた。陽は温暖に降り洒ぎ、風は花々揺つてゐた。

木橋の、埃りは終日沈黙し、ポストは終日赫々と、風車を付けた乳母車、いつも街上に停つてゐた。

棲む人達は子供等は、街上に見えず、僕に一人の縁者^{みより}なく、

風信機かぜみの上の空の色 時々看るのが仕事であつた。

さりとして退屈してもあらず、空気の中には蜜があり、物体ではないその蜜は、常住食すに適してゐた。

煙草くらはみは喫つてもみたが、それとて匂ひを好んだばかり。おまけに僕としたことが、戸外でしか吹かさなかつた。

さてわが親しき所有品もちものは、タオル一本。枕は持つてゐたとはいへ、布団ときたら影だになく、齒刷毛はブラシくらはみは持つてもゐたが、たつた一冊ある本は、中に何にも書いてはなく、時々手にとりその目方、たのしむまでのことだつた。

女たちは、げに慕はしいのではあつたが、一度として、会ひに行かうと思はなかつた。夢みるだけで沢山だつた。

名状しがたい何者かが、たえず僕をば促進し、目的もない僕ながら、希望は胸に高鳴つてゐた。

*

林の中には、世にも不思議な公園があつて、無気味な程にもにこやかな、女や子供、男達散歩してゐて、僕に分らぬ言

語を話し、僕に分らぬ感情を、表情してゐた。

さてその空には銀色に、蜘蛛の巣が光り輝いてゐた。

.....

初出の形での引用である。初出では「ゆきてかへらぬ」の下に「(未定稿)」と記されている。この詩はサブタイトルに「京都」という「場」を示す情報が組み込まれている為に、従来「昭和十一年の秋、中原中也が回想した京都」⁽⁸⁾「京都時代の中世の精神の様相」⁽⁹⁾として読むことで、安定した理解がもたらされてきた。大岡昇平は「希望を持つて生きていた」中原が「東京の生活に疲れた」とき、このような「回想」が起こつたのであると分析する⁽¹⁰⁾。では、ここからは作家の伝記を括弧に括り、作家論的情報を介在させない一篇の独立したテクストとして分析・読解していき、「ゆきてかへらぬ——京都——」の新たな相貌を顕わしていこう(以下、「ゆきてかへらぬ」とする)。

この詩の冒頭を見て気付かされるのは、「京都」という都市空間トを「この世の果て」という位置付けで表現していることである。「この世の果て」⁽¹¹⁾「京都」には「棲む人達は子供等は、街上看見えず」、また「世にも不思議な公園」が存在しており、そこで「散歩」をしている「女や子供、男達」は「僕に分らぬ言語を話し、僕に分らぬ感情を、表情してゐる。仮

に「京都」というサブタイトルがなければ、「僕」が見知らぬ土地にでも迷い込んでしまった物語として読むことも可能であろう。ここには、観光都市としての雅やかな古都像は全く描かれていない。実際、谷崎潤一郎が「東京は勿論の事、奈良へ行つても、鎌倉へ行つても、過去の時代の面影は、跡方もなく現代の勢力の下に蹂躪されて了つて居るが、京都は比較的此の憾みが少い。尤もつい近頃は、市有電車が始まつて、ドシドシ旧態が破壊されつゝあるから、京都の昔を偲ぼうと思ふ者は、一日も早く遊覧に出かけるのが肝腎である」（『朱雀日記』一九一二年刊）と語る（〈古都像・京都〉の姿は、近代にはいつて文学者たちによつて「創り出され、構築され、形式的に制度化された「伝統」¹¹⁾」である。〈京都〉は急速に都市化する〈近代都市・東京〉と差異化するために、「過去の時代の面影」を感じ取れる場所としてそのイメージを形成してきたのだ。このような「伝統の創出」¹²⁾に関して、E・ホブズボウムは次のように述べている。

通常、顕在と潜在とを問わず容認された規則によつて統括される一連の慣習であり、反復によつてある特定の行為の価値や規範を教え込もうとし、必然的に過去からの連続性を暗示する一連の儀礼的ないし象徴的特質。事実、伝統というものは常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築

こうとするものである。¹³⁾

ホブズボウムのこの引用が興味深いのは、「伝統」が「常に歴史的につじつまのあう過去と連続性を築こうとするもの」だと指摘している点である。つまり、〈古都像・京都〉は「旧態」としての「旧き良き日本」の姿を国民にイメージとして根付かせるために、文学者の言説によつて再現¹⁴⁾表象されたものであったのだ。その戦略は〈京都〉という都市名を（観光名所）として表象していき、人々の脳裏に刻み込んでいく。——だが、中原の詩はこうした表象を徹底的に捨象している。ここには、そのような〈観光名所〉を想起／連想させる表現は一切使われていない。だが、サブタイトルコードに「京都」という都市名が組み込まれることによつて、「ゆきてかへらぬ」を讀んだ〈古都〉をイメージする読者の想像力は非常に混乱させられることになつただろう。そうであるならば、この詩に織り込まれた〈京都〉というテキストには一体どのような意味内容が隠されているのであろうか。

この詩に登場する「僕」の眼差しで捉えた〈京都〉は実に不可解な世界である。決定的なのは「此の世の果て」と「僕に分らぬ言語を話し、僕に分らぬ感情を、表情してゐた」という詩句であるが、それ以外にも「埃りは終日沈黙し」「空気の中には蜜があり」というシュール・レアリスティックな表現も随所

に布置されている。詩Ⅱ文学である以上、それは当然なのかも知れないが、独特な雰囲気Ⅱ世界観を創り上げる一方で、詩の内容に関しては印象として陰鬱な、虚しさが支配する世界であることを窺わせたものであると言える。作品内部の情報のみで分析・読解を行つてみると、ここに登場する「僕」は「散歩して」いる「女や子供、男達」と同じ場所を交通しながらも、一切の情報を共有・把握することができない存在として位置付けられていることが確認できる。つまり、この詩の〈京都〉というトポスでは、「僕」という存在が「女や子供、男達」と同じ空間的内部にあつて、それは外部として機能する存在に構成されているのだ。その証拠に「僕」は〈京都〉に関して「此の世の果て」「僕に分らぬ言語を話し、僕に分らぬ感情を、表情してゐる世界であると認識する。この舞台では「僕」の居場所はどこにも存在していないのだ。しかし、そんな「此の世の果て」で「僕」は「名状しがたい何者かが、たえず僕をば促進し、目的もない僕ながら、希望は胸に高鳴つてゐた」と感じている。——ここには〈京都〉という都市空間から遮断／排除されたと感じる「僕」の心情が投影された心象風景が描写されているとひとまず結論づけることができるだろう。だが、この詩に織り込まれた〈京都〉というテキストには、さらに別の役割が担わされている。

この詩を外部（大きな物語）としての政治）からの観点で考えてみよう。前述の佐々木の論を参照することになるが、関東大震災以降に急変していく東京の都市生活の様式は、一時的ではあるが、東京中心に築き上げられてきた中央文化が中断し、そこに集中していた文化が大量に地方へ流出した時期でもあつた。それは、近代文化が反転したことを意味している。佐々木は「都市の読み替えと書き替えが起こつてきた」ことを示していると言ひ、その代表的な出来事を「東京小唄」の募集に見ている。

ちなみに、震災後の東京が復活した昭和五年、「帝都復興祭」が催され、それに呼応して昭和八年に読売新聞が「東京小唄」を募集した。中原中也はそれに応募し落選している。中原の生活資金かせぎであつたに違ひないこの応募行為は、都市東京が流動し始め、そのなかへ地方が入り込むという構図をよく示している。東京の地元の唄を地方出身者が作るということ。これは震災以降、東京方言が衰退し標準語が支配し始めたということの、象徴的な姿でもあるだろう。（中略）首都東京はそれまで地方文化の頂点に位置していた。「近代的なるもの」というのは、東京と地方を一直線で結びつけること（その近道をどう作るか）にかかつていた、と言つてもよい。それが天災によつてあつた

いうまに瓦解したとき、「近代」もまた裏返しになった。⁽¹⁴⁾

佐々木は「震災」を契機に、東京／地方という二項対立図式が崩れ、文化の境界線が取り払われたことを指摘する。実際、震災以降には、地方に第一次大戦後のヨーロッパで起こった前衛芸術運動（ダダ、立体派、未来派、表現派、構成派、シュール・レアリズム等）を紹介する書籍が流出していたのだ。小田切進の指摘によれば、これらの前衛芸術運動が紹介されたのは震災以前であるが、運動としての熱を帯び、人々の強い関心を喚起させるのは震災以後である。⁽¹⁵⁾これは、東京中心に展開されてきたモダン都市化現象が、地方都市にも現出していたことを意味している。例えば、上野裕は「古都の近代化」という観点で地方都市であった京都について調査した結果を次のように述べている。

京都は、東京遷都により都市発展の根底にあった「帝都」としての地位を失う。反面、積極的にヨーロッパの近代的な制度や政策を取り入れて京都の再生・復興をはかった。この近代的な都市づくりをめざす諸事業は、「京都市策」という名の下で明治から大正期にかけて実施され、結果的にはその後の都市発展のインフラ整備をなすことになる。⁽¹⁶⁾この「京都市策」に見られる具体的な事業の一つに「疎水事業」を含む「水力発電事業」を挙げることができるだろう。堀

江保蔵は「疎水事業」に関して「我国最初の水力発電事業であ」と言い、「之に關聯して思ひ出されますのは、京都が靜止的な無氣力な町であるにも拘らず、京都が又頗る尖端的な町であるといふ事でありませ」と、「京都」における（モダン都市化現象）について指摘している。では、この（モダン都市化現象）という、（観光都市）とは差異化された（京都）のコンテクストを導入することで、中原詩を分析・読解していくことにしよう。

モダン都市についての研究は多岐にわたって進められてきたが、その特性の側面について、鈴木貞美は次のように言及している。

都会は見知らぬ人びとの集合であり、そこで育った人にさえ隅々まで知られることのない場所であり、しかもその表情は絶えず変わる。都会のセンターでは、珍しいことが次々に引き起こされ、それを見たさに人が集まる。資本のメカニズムが組織したはずの都会は、実は人がどんな面妖なことに出会っても不思議のない場所なのである。⁽¹⁹⁾

鈴木はモダン都市の発展過程で「見知らぬ人びとの集合」によって形成されていく「都会」について、「そこで育った人にさえ隅々まで知ることのできない、迷宮としての役割があることを指摘している。そして、そんな「都会」は「どんな面妖

なことに出会っても不思議のない場所」として位置づけられているのだ。同様の問題について、石堂藍は「人間疎外という近代特有のテーマを扱っていると言ってもいいだろう。近代特有の、と言ったが、これはむしろ近代的都市に特有な、と言いつても良い。都市的な環境がそれを育むからである。(中略)

都市とはこのように人間性が奪われるところでもある」と分析している。⁽²⁰⁾鈴木、石堂の分析は、煌びやかに発展を遂げていく〈モダン都市化現象〉が内包する負の問題点である〈人間性の喪失〉について追求している。

このような当時のモダン都市と人間の関係性という問題／^{パラダイム}枠組みを導入して「ゆきてかへらぬ」の言語編成を分析していくと、この詩に織り込まれた意味内容が当時の〈モダン都市化現象〉の問題系を内包していることに気付かされる。特に、後半部に描出される次のような一文を読み解く際、〈人間性の喪失〉を窺わせる〈モダン都市化現象〉の問題系を導入することは必要不可欠な要素ではないだろうか。

林の中には、世にも不思議な公園があつて、無気味な程にもにこやかな、女や子供、男達散歩してゐて、僕に分らぬ言語を話し、僕に分らぬ感情を、表情してゐた。

これを単に「中原文也が回想した京都」という作家論的枠組みで読み解いたのであれば、詩としての自律性はかなり低いも

のなるだろう。この詩世界には、「都会」の現実と対峙する「僕」の精神性がレトリックを伴いながらも見事に露呈されている。「ゆきてかへらぬ」は単に、「僕」が「回想」する「京都」での生活を描いただけの詩ではない。そこには、鈴木、石堂の両氏が指摘する当時の〈モダン都市化現象〉の問題系が〈京都〉というテキストとして織り込まれていたのである。つまり、「ゆきてかへらぬ」は大岡を中心とする先学の諸氏が言うような「東京の生活に疲れた」詩人が「回想」した「京都」という観点で読み解ける詩としてだけ存在しているのではなく、「人間性が奪われるところ」である〈モダン都市化現象〉の特性が、詩の内部に組み込まれた意識的な構成で生成されたものとして読める詩でもあったのだ。そして、このことは、佐々木が指摘した東京／地方という二項対立の廃棄から導かれた地方都市の前景化による問題系を喚起させるものでもある。「ゆきてかへらぬ」は近代都市化していく〈地方都市・京都〉の問題系を内包した詩としての役割を担っていた。そして、そこには明治以降の文学者たちが「旧き良き日本」の象徴として「創られた伝統」として表象していく〈古都像・京都〉の姿を窺うことはできない。この詩は、従来の〈古都像・京都〉イメージを脱構築した新たな〈京都〉を織り込んだ詩として機能していたのである。

このような中原作品と《京都》の関連について、次節では小説を中心に検討・分析していくことにしたい。

3 小説に表象される《京都》

中原は《京都》を題材にした小説を一九二〇年代前半を中心に集中的に書いている⁽²¹⁾。そんな中原の初期小説とも言えるこれらの作品を概観していくと、物語に組み込まれている内容が《学生生活》から材を取ったものであることが明確化する。従来の研究史では、中原自身が郷里から離れて京都の立命館中学で学んでいた時期と重なるため、そこに描かれている登場人物に、実的な作家を投影することで安定した読みの位相が保持されていたことは言うまでもない⁽²²⁾。確かに、「京都時代」における自身の学生生活を素材にしていた点は考慮する必要性があるだろう。しかし、いかに自身の経験がプレテクストになつていようとも、「小説」というジャンルとして規定されている以上、そこには様々な変形・仮構が加えられているはずである。では、変形・仮構が加えられたこれらの小説の織物から《京都》というテクストの糸を抜き取っていき、その意味内容について分析・読解していくことにしよう。

「京都」を舞台にした小説である「鉄拳を喰った少年」は、

「第三高校」に対する羨望の眼差しを持つ少年「彼」が、羨望の深きゆえに「第三高校生」に「擲られ」という事件を引き起こす物語である。ここに登場する「彼」の「第三高校」への羨望の度合いは、一種異様さを帯びたものとなっている。また、ここに登場する「第三高校生」の愛校心も、普通のレベルを超した異常な状態であると言えるだろう。そのような印象を決定的にするのが、次に引用する「僕」と「第三高校生」とのやりとりである。

全国の中学生の、殊には彼の住む此の京都の中学生の、羨んでも羨みきれぬ第三高校——それは京都にあるから——の学生である。彼の鞆の上にはその高校の徽章が書いてある。或時それを見付けた第三高校生は小癩なといふので彼を擲つたさうである、けれども彼にはそれを消し取る勇氣は出なかつた。それに擲られてみると尚更彼にとつて第三高校生は羨むで当然のものとなつてしまつたのである。

ここに登場する主人公の「彼」は、「鞆の上に」「第三高校」の「徽章」を書いていたという理由で、「第三高校生」に「擲られ」という不運を「当然のものと」して受けとめてしまう。「京都の中学生」としての役割を担っている。「彼」が「擲られて」「当然」だと思ふ理由は、「第三高校」への「羨」みからである。また、「第三高校生」は「某私立中学」の「彼」が

「第三高校」の「徽章」を「鞆の上に」書いていたというだけで、烈火のごとく怒り、「小癩な」と言つて「彼を擲つ」てしまふ。ここには、自尊心と愛校心を人一倍強く持ち、自分たちが特別視される存在であることを誇りに思ふ「第三高校生」と、そのどちらも持てずに、「第三高校」という学校名が放つ強いブランドに対して、ただ「羨む」ことしかできず、あげくの果てには、「擲られて」も「当然のもの」として受けとめてしまふしかない「某私立中学生」という二項対立的な図式での把握が成立する。

このような図式は、ほぼ同時期に制作された「校長」にも見出すことができる。

田舎の県立中学で歴史の教師をしてゐた彼が、今度京都の或私立中学の校長を勉めることになつた。(中略)

彼を校長としてゐる中学は、京都市の私立中学では一番好いと云はれてゐる。彼が此の中学に転任と定つた際、

最初此の学校のこととして聞いたのはそのことであつた。

然るに来てみると、彼の眼に映つた此の中学は目茶苦茶なものであつた。彼が今迄、田舎の中学にばかりゐたために一つにはさう思へたのだが、そんなことには氣付かなかつた。

「これでは不可ない！」と第一日の日、彼は頭に思込ん

だ。「さあこれから、俺はこれを改めなくちゃ……」

だが、今迄のやうに、自分のすることは直ちに郡視学の耳に入り、県視学に聞達するやうなことは、都会ではあるし、それに私立中学のことだからないだらうと思はれた。市から少し離れた、田圃の中に建つ校舎の様が、茫然淋しく心に描かれてゐた。

(中略)

朝の空氣が尚冷々とした広い一室の右と左に、ズラリと縦に二列に教師達の粗末な机が並んでゐた。正面の窓から差込む朝日が、それ等の机の上の硝子で出来た印肉皿や、野紙の上を薄く斑らに流れてゐた。彼が這入つた時、教師達は誰も話をしてはゐなかつたが、それと知ると其処にゐた全部の者は一斉に、不馴れな人間に対する心意気のない、畏敬の表情を作つて差向けてゐた。彼はこれからしようと思つてゐる訓辞はまた後で、全部教師等の集つた上ですることにしようかとも一度は願つたが、……もう堪らなかつた。(中略)

「かやうな都会の私立中学にあつては、編入者や退学者が大変多いために、生徒の愛校心は至つて乏しいのである。依つて本校の創立趣旨を出来る限り屢々生徒に聞かせ、又編入者に対しては速かに本校の空氣に慣れしめるやう努め

て戴かんければならないと考へられるのである」(中略)

けれども彼の「本校」といふ言葉の中には、「私立」といふことを非常に特殊扱ひしてゐる響があつたために、ズツト此の学校に勉めて来てゐる教師達には、一種異様に聞えたのである、訓辞はたゞ訝しさを与へたばかりであつた。

反感を抱いた者さへも中にはあつた。(傍点原文のまま)

「校長」は「京都市の私立中学では一番好いと云はれてゐる」評判の良い「私立中学」が、実は「目茶苦茶」な状況にあり、「編入者や退学者が大変多いために、生徒の愛校心は至つて乏しい」状態にあるという設定が取られている。ここでは、改革を推進し、生徒の「愛校心」を引き出すために努力する新しく赴任してきた新「校長」と、荒廢した雰囲気の中で「愛校心」の欠如した「生徒」及び、そんな雰囲気馴染んでしまつてゐる「教師達」という二項対立図式ができあがる。この後、「校長」は様々な改革を實行していくが、「生徒」「教師達」、また「生徒の父兄達」からも反感を買つてしまふ。着任後一年が経過し、自身の改革を反省していく事になるが、もはや手の施しようがない状況になつてしまつたところで小説は幕を閉じる。

これら二作には、ある共通したテーマが流れている。それは、「学校」というシステムのなかで統轄管理された(人間性)

の差異の現出、もう少し詳細に言えば、人間が知識を交通させる空間として造り出した「学校」で産み出された(権力)に、人間が支配率されていく状態が描かれているということである。特にここでは、「第三高校/某私立中学」「県立中学/私立中学」という枠組みのなかで人々が感じている優/劣の関係性が考えられる。これらの関係性は、(学校)という制度が生徒の能力、家庭環境によつてその布置を決定する構造を示す。そして、生徒の心情に固定されたイメージを形成していき、その行動/思考までも支配率する(権力)の構造ができあがるのである。ここで想起されるのは、次に引用するM・フリーの言葉だろう。

権力の関係は他の形の関係(経済的プロセス、知識の關係、性的關係)に対して外在的な位置にあるものではなく、それらに内在するものだということ。そこに生じる分割、不平等、不均衡の直接的結果としての作用であり、また相互的に、これらの差異化構造の内的条件となる。権力の關係は、単に禁止や拒絶の役割を担わされた上部構造の位置にはない。それが働く場所、直接的に生産的役割を持つて⁽²³⁾いるのだ。

ここで重要なことは、(権力)の構造ができあがるのが「上部構造の位置」からではなく、「それが働く場所」||日常的な

生活の場所で「直接的に生産的役割を持つている」ことだと思考するフーコーの論理である。つまり、〈学校〉という制度が歴史的展開の過程で優／劣の枠組みを形成していき、それが社会構造化して教師や生徒の思考を支配し統率していくという図式。吉田熙生は「校長の型通りの熱意」が「〈私立〉のぐうたらさに足をすくわれ」ていくと分析する。⁽²⁴⁾このような分析の背後にあるのは「それが働く場所で、直接的に生産的役割を持つている」という「権力の関係」の構造であると言えるだろう。ともあれ、これらの小説を分析・読解して導き出される〈京都〉の一側面としては、〈学校〉の優／劣で支配し統率される〈人間性〉の様相があげられる。では、このような〈学校観〉を形成する中原小説に、その作品が生成された当時の社会的観点を導入して捉え直してみよう。

小説「校長」にはモデルの存在が指摘されている。そのモデルの存在について吉田熙生は「校長のモデルは当時の立命館中学校長兼竜谷大学教授吉村勝治、教頭のモデルは塩崎達人。塩崎氏によればデテールはだいたい正しいが、学校が選挙運動事務所に使われた記憶はない」と述べている。⁽²⁵⁾作家論的に興味深い言説であるが、ここではそのことについて深く追求することはしない。むしろここでは、当時の「京都市の私立中学」の状況を考察していくうえで、一九二〇年代の「立命館中

学」について検討していきたい。

実は、一九二九年九月二九日付の「日出新聞」には「都下の中等学校(6) 自由主義の立命館中学 放漫に流るゝの弊なきや」という特集記事が掲載されている。

文部省認定立命館中学は一学年生百五十名を募集し、二三年に若干名を編入する学校の特長としては左程取り立て、云ふ程の事はないが中学としては比較的／自由主義で束縛がない様だ。大学部と同じ場所⁽²⁶⁾で教を受ける関係上自由が過ぎてだらしなくなるのは戒むべきである。此は立命館に限つた訳ではないが生徒の一番真似をしたがるのは上級生で自らの地位を考へずして直に取つて自分に適用し様とする。(中略) 府立中学の落武者や其の他の学校での失敗者が殺到して小さい心に角を立て波を騒がせて戦ひを挑む事であらう。

ここに引用した記事を注意深く見ていくと、この記事の内容が「鉄拳を喰つた少年」「校長」に織り込まれた〈学校観〉と類似していることに気付かされるだろう。特に、「校長」で「かやうな都会の私立中学にあつては、編入者や退学者が大変多いために、生徒の愛校心は至つて乏しいのである」と新校長が語る「訓辞」の内容には、「都下の中等学校」という特集記事で書かれた「若干名を編入する学校の特長として」の「学校

での失敗者が殺到」するという言説が用いられていることは言うまでもない。そして、ここで注目すべき点は「此は立命館に限った訳ではない」と指摘されていることである。この指摘は、問題が「立命館中学」に留まるものではなく、広く「都下の中等学校」全体に広がっていることを示唆したものであると言えるだろう。そして、これらの言説は、この問題が一九二〇年代の〈中学教育〉を巡る社会的問題であったことを我々に語りかけてくる。つまり、中原が作品に織り込んだ〈京都〉Ⅱ〈学校観〉というテクストは、一九二〇年代の社会的文脈で発生していた〈中学教育〉を巡る問題であったのだ。⁽²⁷⁾

では、「鉄拳を喰った少年」に織り込まれた「第三高校」についてはどうだろう。一九二〇年代の「第三高校」は、京都学派の指導的立場であった西田幾多郎の門下である田辺元、務台理作、三木清等が教鞭をとった時期にあたる。田辺元は一九二一年から約一年間、務台理作は二二年から二五年まで、その後三木清が昭和初期まで教鞭をとった。⁽²⁸⁾このような「第三高校」の教育制度について大宅壮一は「当時の三高は自由主義的な教授の勢力が強く、これを押えるため文部省から選ばれて金子詮太郎という校長が乗りこんできた」と回顧している。⁽²⁹⁾このような「自由主義」が浸透する背景には、当時の高等学校入試制度が抱えていた問題系がある。

戦前のわが国学校体系において、最高学府たる帝国大学への最終の関門は高等学校であり、それゆえに、高等学校への入学が困難をきわめ、きびしい受験競争が展開されてきたことは、周知のとおりである。／一方、高等学校から帝国大学への門戸は、なかば無試験にも近くひろく開放されていて、高等学校への入学は直ちに帝国大学への進学を約束していたから、最高学府をめざす戦前期の受験者にとって、最終の試験ともいえたのが、高等学校への入学試験だったわけである。⁽³⁰⁾

「きびしい受験競争が展開され」た「戦前期の受験者」が、「高等学校への入学」を勝ちとることによって与えられたのが「直ちに帝国大学への進学を約束」してもらえするという特権であった。つまり、「第三高校生」は「帝国大学」で学ぶことを「約束」された特権階級者であったのだ。「鉄拳を喰った少年」には、このような「受験競争」を勝ち残った「第三高校生」の異様とも思える自尊心と愛好心が織り込まれている。そして、そんな「第三高校生」に羨望の眼差しを向ける「某私立中学」の「彼」のような存在は、当時の受験体制下で形成された「学生」の特性を示す一例であったと言えるだろう。

ともあれ、「インテリを思想的に指導」し、「自由主義的な教授の勢力が強」い「第三高校」はまさしく当時の「都下の中等

学校」の憧れの対象であった。これらの資料を検討・分析しただけでも、いかに実的な詩人の人間性だけで作品を論じていくことが危険であるかが分かるだろう。作品に織り込まれるのは作家自身の経験／記憶だけではない。そこには、当時の社会的観点から見えてくる歴史／政治が網の目のコンテキストとして導入されていたのだ。

4 結／今後の課題

以上、本稿は作品に織り込まれた〈京都〉の特性について検討してきたが、そこに織り込まれていたのは〈モダン都市化現象〉／〈学校制Ⅱ権力装置〉などであった。従来、中原中もという詩人のイメージが余りにも強すぎるため、これらの作品を分析する際に作家論的手法が用いられてきたことは前述した通りである。本稿では、これらのイメージからの脱却を試み、視点を社会的文脈へと移した。そこで用いた方法論は、前田愛が「作家主体と自我の中心化にこだわるあまり、袋小路に入りこんでしまった観がある」と懸念した「日本の近代文学」／「近代文学史」に対して行った次のような実践であった。

しかし、そのような狙いとあわせて、私の念頭から離れなかつたのは、日本の近代文学を自我の発展史として鳥瞰

するこれまでの文学史研究のパラダイムにたいする異議申し立てであった。それはテキストとしての都市をメタテクストないしはサブテクストとしての文学作品と対応させて行く操作によって、実体概念としての作者を関係概念の括弧に括弧ことを意味している。⁽³³⁾

前田の指摘は、文学作品を文化的／都市的文脈から捉えた視点として優れたものである。本稿の試みには、この前田の視点が非常に重要な役割を果たした。本稿では中原の詩／小説に織り込まれた〈京都〉の表象について考察し、以上のような結論を導き出した。しかし、課題はまだ残されている。

中原には日々の営為を記録／記憶している大量の日記や書簡が残されている。そこには、〈京都〉に関して書かれたものも多々見受けられる。日記／書簡を一つの〈文学〉と見なすのであれば、これら膨大な書記行為については検討されねばならない。⁽³⁴⁾「日記文は日記に文の一字を加へただけ、文学の領域に入ったのである」(吉田甫『日記文作法』昭文堂、一九〇八年三月)「日記は一箇独立した文芸であることを立派に認むべきである」(小林愛雄『日記新文範』新潮社、一九一〇年二月)等、明治期の日記を巡る言説に従えば、日記を一つの〈文学〉と見なす欲望は既に確率された視座であった。⁽³⁵⁾つまり、中原の日記／書簡を一つの文学テキストとして検討・分析し、そこに織り

込まれた〈京都〉の表象について考察することは、中原文学における〈京都〉の新たな局面を知るうえで、非常に重要な課題であると言えるのだ。だが、この点については今後の課題として検討することにして、詳細についての報告は稿を改めたいと思う。

註

- (1) 「新文芸日記（精神哲学の巻）」一九二七年二月一三日（『新編中原中也全集』第五卷「本文篇」角川書店、二〇〇三年）
- (2) 「我が詩観」一九三六年八月（『新編中原中也全集』第四卷「本文篇」角川書店、二〇〇三年）
- (3) 大岡昇平「京都における二人の詩人」（『群像』（原題「二詩人」）一九五六年 但し引用は『中原中也』角川書店、一九七四年による）
- (4) 吉田熙生『評伝中原中也』東京書籍、一九七八年
- (5) 中原フク述・村上護編『私の上に降る雪は わが子中原中也を語る』講談社、一九七三年
長谷川泰子述・村上護編『ゆきてかへらぬ 中原中也との愛』講談社、一九七四年
- (6) 大岡、吉田 前掲書。
- (7) 佐々木幹郎『中原中也』筑摩書房、一九八八年
- (8) 大岡昇平「富永の死、その後」（『別冊文芸春秋』第五〇号（原題「詩人の死まで」）一九五六年 但し引用は『中原中也』角川書店、一九七四年による）
- (9) 河野仁昭『京都文学紀行』京都新聞社、一九九六年
- (10) 大岡 前掲書（8）
- (11) E・ホブズボウム、T・レンジャー編／前川啓治、梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊国屋書店、一九九二年
- (12) 前掲書。
- (13) 前掲書。
- (14) 佐々木 前掲書。
- (15) 小田切進『昭和文学の成立』勁草書房、一九六五年
- (16) 植村善博・上野裕編『京都地図物語』古今書院、一九九九年
- (17) 豊田多八編『京都の歴史』高陽社印刷所、一九三六年
- (18) 前掲書。
- (19) 鈴木貞美「解題」（『モダン都市文学Ⅳ 都会の幻想』平凡社、一九九〇年）
- (20) 石堂藍「東京のイメージ」（『幻想文学』六一 アトリエOC TA、二〇〇一年）
- (21) 「その頃の生活」（草稿 一九三三年秋―冬制作（推定）、「鉄拳を喰った少年」（草稿 一九三五年一月一三日制作）、「校長」（草稿 一九二五年春制作（推定））。なお、「その頃の生活」は「京都の某中学校に転校」したところで話が終わる為、本稿では分析の対象とはしていない。
- (22) 吉田 前掲書が特に中心的。
- (23) M・フーコー／渡辺守章訳『性の歴史Ⅰ 知への意志』新潮社、一九八六年
- (24) 吉田 前掲書。
- (25) 前掲書。
- (26) 二木晴美「京都時代の中原中也——生活の軌跡」（『中原中也研究』第五巻、二〇〇〇年）では、この資料も含め、中学時代の中原の下宿先／学校などを調査する実証的な研究がなされて

いる。

(27) これらの問題系に関して、『日出新聞』一九二〇年三月一日付「立命館彙報」、一九二二年四月二三日付の記事では「新学期と学校」という特集の「六」で「立命館中学」を取り上げている。

(28) 『写真図説 紅萌ゆる丘の花 第三高等学校80年史』講談社、一九七三年

(29) 前掲書所収。

(30) 『神陵史——第三高等学校八十年史——』三高同窓会、一九八〇年

(31) 前掲書(28)

(32) 前掲書。

(33) 前田愛「あとがき」(『都市空間のなかの文学』ちくま学術文庫、一九九二年)

(34) 日記についての考察に関して、「シンポジウム『日記と文学——「真実」の表現をめぐって——』」(『語文』一九九四年)、「日記及び日記文学——歴史・「文学性」・性差——」(『文学』一九九一年)といった特集があるので参照されたい。

(35) 佐々木基成「物象化される〈内面〉——日露戦争前後の〈日記〉論——」(『日本近代文学』第六七集、二〇〇二年)

〔付記〕

本稿は、二〇〇四年度佛敎大学総合研究所基礎研究「京都における日本近代文学の生成と展開」(七月二二日、於佛敎大学)において発表し、二〇〇五年度四季派学会冬季大会(十一月二六日、於中京大学)においても報告したものである。会場内外でご教示下さった先生方、院生の方々へ心から感謝を申し上げます。なお、

「ゆきてかへらぬ」の詩は掲載誌から、評論・小説は角川書店版『新編中原中也全集』第四巻を底本とした。引用に際して旧字は新字に改めた。